

焼
津
に
て

訳 村 松 眞 一
(静岡大学名誉教授)

日がカンカン照ると、焼津というこの古い漁師町は、中間色の、言うに言えない特有な面白味を見せる。まるでトカゲのように、町はくすんだ色調を帯びて、それが臨む粗い灰色の海岸と同じ色になり、小さな入り江に沿って湾曲しているのである。町は、大きな丸石を積み上げた異様な堤防によって、荒海から守られている。この防壁は、波打際では、台地の階段のような形にできている。それを組み立てている丸石は、地中に深く打ち込んだ杭の列の間に、籠細工のようなものを編みこんで、しっかりと固定され、杭の列一列が、それぞれの段を支えているのである。こうした作りの防壁の頂きから陸の方へ目をこらすと、町全体が一望のうちに見渡せる。灰色の瓦屋根や風雨にさらされた木造の家並が広がる空間、そのあちこちに、松の木立が寺の庭のありかを示している。海の方は、何マイルも続く水面の向こうに雄大な眺め。ギザギザの青い山並みが地平線にくつきりと群がるさまは、巨大な紫水晶のよう。そして、その彼方、左手には、まぼろしのような富士の神々しい姿が、ひときわ高く聳え立っている。防壁と海の間には砂はなく、ただ石の、主として丸石の、灰色の斜面があるばかり。そしてこの石が、打ち寄せる波とともに転がるから、荒れ模様の日には砕ける大波のそばを通るのは、いやなものである。もし一度でも打ち寄せる石に打たれると、私は数回やられたが、その経験はすぐには忘れられない。

ある時刻になると、このでこぼこの斜面は、何列もの奇妙なかつこうをした船。この地方に特有な形の船。がおおかた塞いでしまう。それは、非常に大きなもので、一隻あたり四、五十人は乗せられる。その舳先は妙に高く、それには通例仏教または神道の護符（マモリとかシユゴとかいうもの）がついている。よくある神道の手書きの護符は、富士山に祀られた女神の社から、この目的のため頂いてくる。その護符の句は、「富士山頂上浅間宮大漁満足」とあって、船の持ち主は、大漁に恵まれた場合、富士山の頂上に祀ってあるその神のために、大いなる苦行を行うことを誓います、という意味である。

日本の、どの沿岸地方でも、また同じ地方でも漁村が違えば、船や漁具の形は、その地方や部落によって異なっている。実際、せいぜい2、3マイル離れた部落がそれぞれ異なった形の網や船を製造し、それはあたかも、数千マイルも離れた民族の発明かと思われるくらい異なっている。かように驚くほど多種多様なものがあるということは、ある程度は、地域の伝統に対する尊敬の念、つまり、何百年間も祖先の教訓や習慣を保存してきた敬虔な保守主義によるものかもしれない。しかし所変われば漁法も変わるという事実の方が、もっとよく説明がつけられる。だから、どこでも、ある一か所で作られる網や船の形は、調べてみると、ある特殊な経験による発明であることがわかるらしい。焼津の大きな漁船は、この事実を例証している。この船は、焼津漁業の、日本全国へ鯉節を供給するという、その特殊条件に合うように考案されたもの。従ってそれは、非常な荒海を乗りきれぬものでなければならなかった。このような船を

海へ出したり引き上げたりするのは、大変な仕事である。が村中総出で手伝う。まず一種の船曳き台をまたたく間にその場でこしらえるが、それは平たい木の枿を斜面に一列に並べるのである。それから、この枿の上に、平底船を長い綱を使って引き上げたり、引きずり下したりする。こうして、たった一隻の船を動かすのに、百人か、もつと多くの人々が、男も女も、そして子供たちまでも一緒になつて、奇妙なものの悲しい歌に合わせ、引っぱっているのが見受けられる。台風が来るといふ時は、船はずつとうしろの町のなかまで運ばれる。そういう仕事を手伝うのは、なかなか面白い。もしこちらが異人なら、漁師たちは、その労をねぎらつて、海でとれた色々珍しいものを見せてくれる。びっくりするほど長い脚をした蟹とか、まったく馬鹿らしいほど腹をふくらませる河豚とか、その他さまざまなきき物の、その異様な形は、手に触つてみなければ、それが自然のものとは、とつてい信じられない。

舳先に護符をつけた船が、浜辺で一番奇妙なものというわけではない。もつと目を引くのは、竹を裂いて作った餌籠である。高さ6フィート、周囲は18フィートもあつて、丸屋根のてっぺんに小さな穴が一つ。防波堤沿いに並べて乾してあり、少し離れて見ると、何かの棲み家か小屋とまちがえられそう。それから、まだ目につくものは、大きな木製の錨。鋤のような形で、金属が打ちつけてある。鉄の錨、これには四つの爪がある。巨大な木槌、これは杭を打ち込むに用いるもの。その他、色々な道具類は、一層見慣れぬ不可解なもので、使い途の見当もつかない。どれもこれも、表現のしようもない古風な奇妙さで、この世のものならぬ、あの遠く離れた 時空をはるかに隔てた 感じがして、目のあたりの現実性を疑わしめる。それに焼津の生活が、確かに何世紀も前の生活なのである。この土地の人たちも、旧日本の人々で、子供たち 善良な子供たち のように開けっ放しで、優しくて、正直すぎるのが欠点、先の世のこ
となどつゆ知らず、古いしきたりや古い神々を、ただ一途に守っているのである。

たまたま私はボンつまり死者の祭りの三日間焼津にいた。それで最後の三日目の美しいお別れの儀式を見たいと思つた。日本の各地で、精霊には、その船の旅のための超小型の船が供えられる。平底船か漁船の小さな模型で、それぞれ食物と水と、火をともした香のお供えを入れ、もし精霊船が夜送り出される場合は、小さな灯籠か灯明も乗せるのである。しかし焼津では灯籠だけ流す。聞くところでは、灯籠は暗くなつてから送り出されるということであつた。よそでは、真夜中が慣習的なその時刻であつたから、焼津でも、それがお別れの時刻かと思つた。それで、うかつにも私は夕食後つたたねをしてみました。その見物に間に合うように起きるつもりであつた。ところが10時までには私が

浜辺へ再び行ってみると、すべてが終わって、みんな家に帰ったあとであった。海上には長い蛍の群れのようなものが見え、灯籠が列をなして沖へ流れ出ているのであった。だがもう遠すぎて、色とりどりの光の点として見分けはつかない。私はひどく失望した。二度と帰らぬ好機を、うっかり逃してしまったと思つた。こういつた古いお盆の習慣は、急速に消えつつあるからである。しかし次ぎの瞬間、ふと思いついたのは、その灯のところへ、思いきって泳いで行つてみればよいという考えであつた。灯はゆっくりと動いていた。私は着物を浜辺に脱ぎ、飛びこんだ。海は穏やかで、美しい燐光を放っている。一掻きすること、黄色い火の流れがきらめいた。急ぎ泳いでゆくと、思つたよりずっと早く、一番後の灯籠に追いついた。このささやかな船出に邪魔をしたり、静かに流れるその進路を変えたりするのは、心無いことだと思われた。そこで、その灯籠の一つに近づき、それをくわしく調べてみることで満足した。

その構造は至つて簡単であつた。底は厚い真四角の板切れで、縦横10インチくらい。四隅のそれぞれに高さ16インチほどの細い棒を立て、この四本の棒が、上のほうを横木で結んで、紙貼りの四面を支えている。底板の中心、下から打ち抜いた長い釘の先に、火をともした蠟燭を立ててある。上のほうは開けつ放し。四つの側面は、五色、青、黄、赤、白、黒、に色分けされている。この五色は、それぞれ、空、風、火、水、地という仏教の五元素を象徴し、形而上学的に五仏と同一と見做されている。紙棒の一面は赤、一面は青、一面は黄、そして第四面の右半分は黒、左半分は無色で白を表す。戒名は、この透かし紙のどれにも書かれていない。灯籠の内側には、ただチラチラとゆらめく蠟燭の火があるばかりであつた。

私は、じつと目をこらして、あの壊れそうな光るものが、闇夜の中をぶかりぶかり流れてゆくのを見つめた。しかも流れるにつれ、風や波にあおられて益々広がり散らばつてゆく。その一つ一つが、透かしの色を震わせて、怯える一つの命のように思われた。それは、外の暗黒の世界へ運んでゆく盲目の潮の流れに乗つて、身震いしているのだと……私たち自身だつて、まるで灯籠のように、もっと深い、もっとおぼろげな人生の海の上へ送り出され、お互いに益々離れ離れになつて、漂い流れるうちに、否応なしに、バラバラに分解してしまつたのではないか。やがて、めいめいの思想の灯も燃えつきる。それから、哀れな骨組みも、かつては美しい色をしていたすべての残骸も、永遠に色彩のない「空」のなかへ溶けてしまわねばならない……

ふと、こんなことを考えている間にも、私は自分が本当に独りきりでいるのかどうか、怪しくなつてきた。私のそばで揺れるものの中に、単なる光のおのき以上の何かがあるのではないか、消え入りそうな炎につきまとい、それを見つめている自分を、さらにじつと見ているものがないのではないか、と自問しはじめた。かすかな寒けが私の体のうえを走つた。おそらく海の底から上がってくる冷気か、またおそらくは、霊的な空想が忍び寄つただけかもしれない。この海岸の古い迷信が思い出された。精霊が通る時刻は危険だという、古い、それとない警告である。私は、思索した。夜、こつして海に出て、死者たちの

灯に手を出したり、あるいは出しているように見える自分に、もし何か禍がふりかかりでもすれば、この身がいつか不気味な伝説の話題になってしまっただろうと。私は仏式のお別れの文句を、灯笼に向かって唱え、それからまっしぐらに岸をめがけ泳いだ。

再び、浜辺の石に触れたとき、私はギョツとした。ボーツと白い影が二つ眼前に見える。しかし優しい声がして、水は冷たかったですかと聞くので、私はほつとした。それは私の宿の主人、魚屋の乙吉の声で、おかみさんと一緒に、私を探しに来ていたのである。

「ただ冷たくて気持ちよかったです」と、私は一緒に家へ帰ろうと着物をひっかけながら答えた。

「まあ」と、おかみさんが言った。「盆の夜、海へ出るのはよくないです。」

「そんな遠くへは行かなかった」と私は答えた。「灯笼を見たいと思っただけです。」

「河童も溺れ死に、と言います」と乙吉は抗議した。「この村の男で、しけの日に舟がこわれて7里も泳いで帰った者がいました。ですが後に溺れて死んだです。」

7里というのは、十八マイル弱にあたる。いまこの部落にそれだけ泳げる若者がいるのかと私は尋ねた。

「たぶん、おります」と、おやしさんは答えた。「泳ぎの達人なものは沢山おります。この土地のものはみんな泳ぎます、小さい子供でさえ。ですが、漁師がそんなに泳ぐときは、自分の命を助けるときだけです。」

「それとも、恋人があるときとか」とおかみさんがつけ足した。「端島の娘のようにです。」

「誰ですって」と私は尋ねた。

「漁師の娘です」と乙吉が言った。「その娘には、7里離れた網代に好きになひとがおりました。それで、夜そのひとのところへ泳いでいっては、朝泳いで帰ったものでした。男はその道しるべに明かりをともしておきました。ところが、ある暗い晩、明かりを忘れたか、風で消えたかして、それで娘は道に迷い、溺れて死んだです……伊豆では有名な話です。」

「それじゃ」と私はひとりつぶやいた。「極東では、泳いでゆくのは、かわいそうにへ口のほうだ。もしそうなら、西洋ではリアンダのことを、どう評価しただろうか。」

盆のころは、いつも海が荒れる。だから翌朝、大波が高く打ち寄せるのを見ても、私は別に驚きはしなかった。一日中波は高くなるばかりで、3時ごろには、大波は大変なものになっていた。私は、防波堤の上に腰を下ろし、日暮れ

までそれを眺めていた。

それは長いゆつたりしたうねりで、恐ろしく大きいものであった。時には、砕ける直前に、そそりたつ大波が、あたかも微塵に砕けるガラスのようにチリチリと音を立て、緑の波の全長にわたって裂ける。それから足元の防波堤をゆるがすほどの轟きとともに、くずれ落ち、平らになるのであった。…私はふと、今は亡きロシアの偉大な將軍のことを思い出した。率いるその軍隊を、潮のように 剣の波また波 轟く砲声につぐ砲声によって突撃させた將軍であったが、…まだほとんど風は出ていなかった。しかし、何処かで天気が荒れていたに違いない。砕ける大波は、あい変わらず高くなっていた。見ていると波の動きにはすっかり心を奪われる。それはもう、何とも言葉では表しようもない複雑なものだが、また何という永遠の新しさであるう！誰が完全に、その5分間の動きでさえ、描きえよう。かつてどんな人間でも、二つの波がまったく同じように砕けるのを見た者はいない。

そしておそらく、かつてどんな人間でも、大洋のうねりを眺め、その轟きを耳にして、厳粛な思いをしなかった者はいないであろう。動物、牛や馬でさえ、海の前では、瞑想的になるのに私は気がついていっている。その広漠たる光景と轟きが、この世の、他の一切を忘れさせてしまふのかのように、彼らはじつと立ったまま、目を見開き、聞き入るのである。

一つの言い伝えがこの海岸にはある。「海には魂があり耳がある」と。そしてその意味はこう説明される。海にいて怖いと思っても、決してそれを口に出してはならない。もし怖いと言うと、波はたちまち高くなる。…ところで、この想像は極めて自然であると、私には思われる。私が海で泳いでいるか、船に乗っているとき、海が生き物でないとは、私はどうしても信じられない。それは意識があり、敵意をもった力というほかはない。理性はさしあたりこのような想像を押さえるには、何の役にも立たない。海というものが、ただの水の集まりと考えられるためには、私はどこか高い所にいなければならぬ。ちょうどそこから見ると、打ち寄せる大波も、小さいさざ波が、のたりのたり這っているようにしか見えないうように。

しかしながら、この原始的な想像は、日中より夜のほうが、一層強く掻き立てられるであろう。燐光で青く光る夜に、海水がチカチカきらめいたり消えたりするさまは、まるで生き物のおようだ。その冷たい焰の色合が微妙に変わるのには、まったく爬虫類のよう。そんな夜の海にもぐってごらん。それから、青黒つばい暗がりのなかで目を開き、体を動かすたびに、続いて光の粒が不気味にほとばしるのを、じつと見てごらん。水の中で見る光の点々は、まるでその一つ一つが目を開けたり閉じたりしているようだ。そんな瞬間には、実際、何か知覚をもった怪物みたいなものに包まれているかのような気がする。体中どこにでも目があり感覚があり意志がある、何か生命をもった物質の中に、柔らかで冷たい無限の霊の中に、浮かんでいるような感じがするのである。

その夜私は、長い間、眼を覚ましたまま横になって、怒濤が雷鳴のように響き砕ける音に耳を澄ませていた。このようにはつきり聞こえる凄まじい響きや、近くの波が押し寄せるすべての音よりも、一層太く底深いのが、さらに沖合の潮騒であった。建物がそれにつれて震えるほどの、絶え間ない深淵のどよめき、果てしない騎兵部隊の馬蹄や、無数の重砲の集団の響きかと想われる音、日の出の国から全世界に広がるほどの、大軍の突撃のようにも想像される音であった。

それから私はふと、子供のころ海の声に聞き入った時の、漠とした恐怖のことを考えていた。それで思い出したのは、後年、世界各地の色々な海岸で、寄せ波の音が、子供のころのその感情を常によみがえらせたことである。たしかにこの感情は、私個人より何億年も前の古いもので、祖先から受け継いだ数知れぬ恐怖の総和である。しかしまもなく私は、海を恐れる気持ちというものは、海の声によって呼びさまされるおびただしい恐怖の、ただ一つの要素を表すにすぎないという確信が湧いてきた。というのは、駿河湾のあの荒潮にじつと聞き入っていると、人間に知られた恐怖の、ほとんどあらゆる音を聞き分けられたからである。ただ単に凄まじい戦闘の音、果てしない一斉射撃、際限もない突然の喊声ばかりではない、けものが吼える声、火がパチパチシューシュー燃える音、ゴーゴーという地震の地鳴り、ドドツと崩れおちる轟音、そしてとりわけ、悲鳴と絶叫の入り混じった絶え間ない叫喚、溺死した人々の声と言われている「わたつみの声」が聞き入れたのである。憤怒と破滅と絶望の、およそ考えられるすべての反響を一つに合わせた、畏るべきどよめきの極地が。

そこで、私はひとりつぶやいた。海の声が我々を厳粛にさせても別に不思議はないではないか。海が発する多様な声に和して、靈魂の経験という、さらに広大な海の中に動く太古からの恐怖のあらゆる波が応答するのである。淵々は呼びこたえる。現実の目に見える深淵が、先立つ古き存在の、その海にあふれる潮によって、私たちがみな霊となった、あの目に見えぬ深淵に呼びこたえるのである。

それゆえに、死者の言葉が海のどよめきになるという古い信仰には、たしかに少なからぬ真理がある。まことに、過去の死者の恐怖と苦痛が、海のどよめきが呼びさします、あのおぼろげな深い畏怖の中で、私たちに話しかけるのである。

ところが、海の声より一層深く、そしてさらに不思議な作用によって、私たちを感動させ、時には、これも私たちを極めて厳粛な気持ちにさせる音響がある。それは音楽である。偉大な音楽とは靈魂のあらしであり、私たちの心の奥にある過去の神秘を、想像もできないほど深くかきたてるものである。あるいは、こう言ってもよいかもしれない。それは世にも不思議な魔法で、一つ一つの異なつた楽器や声が、未生以前の、何十億という異なつた記憶に別々に訴え

かけるのであると。そこには、青春とその喜びと優しさの、あらゆる面影を呼び起こす音色がある。滅び去った恋の思いの、あらゆる苦しみのみまぼろしを呼びさます音色もある。かつて威厳と権力と栄光を集めた身の、今は無きあらゆる感動 消えた得意の絶頂や、忘れられた雅量のかずかず それらすべてを髣髴とさせる音色もある。自分の人生は百年足らず前に始まったのだと、漫然と夢見ている人には、音楽の効果が説明できないように思われても、無理もないであろう。しかし自己の本質が、太陽よりも古いものであることを悟る人には、この神秘は明らかになる。そういう人には、音楽が一種の降霊術であることがわかる。そういう人は、メロディーのさざ波の一つ一つ、ハーモニーの大波の一つ一つに対して、「生と死の大海」から、古代の快樂と苦痛の、何か計り知れない渦潮が、心中に応答するのを感じるのである。

快樂と苦痛、この二つは、常に偉大な音楽に交じり合っている。それゆえに、音楽は大洋の声よりも、また他のいかなる声よりも、一層深く私たちの心を動かすことができるのである。けれども、音楽が発する一層広い音響の中で、その底に流れるのは、常に悲哀の低音 大霊の海における寄せ波の悲しいざわめきである。音楽の意識が、人間の頭のなかで進化する以前に、人間が経験したに違いない喜びと悲しみの総和が、いかに莫大なものであつたか、思えば不思議な気がしてくる。

どこかにこう述べてあつた 人生というものは、神々が奏でる音楽であるその噉り泣きと笑いも、その歌声と悲鳴と祈りも、また歡喜と絶望の叫びも、不死の神々の耳には、常に完全なハーモニーとしか聞こえないと。それゆえ、神々は苦痛の音色を消そうとは思われなかつた。そんなことをすれば、神々の音楽を台なしにしてしまふ！その音の組合わせは、苦痛の音色を伴わなければ、神々の耳には、堪え難い不協和音になるであらう。

そしてある意味で、私たち自身も神々のようなものである というのも、数知れぬ過去の世の苦痛と歡喜の総和こそ、生來の記憶を通して、私たちに音楽の恍惚境をもたらすものだからである。今は亡き世代のあらゆる哀歡が、ハーモニーとメロディーの無数の形式となつて立ち帰り、私たちの心中に浮かび出てくる。ちょうどそのように 私たちがやがて陽の目を見なくなる百万年後にも 私たち自身の生活の哀歡は、さらに豊かな音楽とともに、別の世の人々の心の中に伝わり、そこで、ある神秘的な一瞬、快い官能的な苦しみの、震えるような何か絶妙の感動をかき立てることであらう。